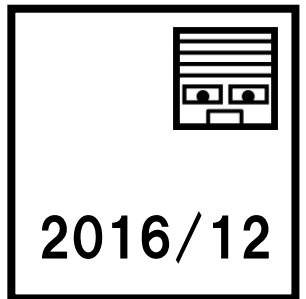




神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
 全国有数の〈社史コレクション〉を
 さらに活用していただくため、
 社史の使い方や、社史の楽しさ、
 社史情報などをお届けしていきます。



終戦後まもない頃、4人の女性を創業者として神戸に誕生した「ベビーショップファミリア」。創業者の1人、坂野惇子（ばんのあつこ）／1918～2005／レナウン創業者の三女）は、現在放送中のNHK朝の連続テレビ小説「べっぴんさん」のヒロインのモデルになりました。今回の「社楽」では、関係する社史から、ファミリアにまつわるエピソードをご紹介します。

※執筆に際しては、おもに、『ファミリア30年のあゆみ』（1980年刊）、『ファミリア50年のあゆみ』（2000年刊）、

および『ファミリア25年のあゆみ』（1975年刊 ※県立図書館所蔵）、ファミリアのホームページなどを参照しました。

【創業のきっかけはハイヒール】

終戦後、空襲で家を失い、預金が封鎖され、不自由な生活をしていた惇子は、働いて収入を得ねばと考えます。子どもの洋服を縫ったり、刺繍や編み物を教えたりしましたが、現金で請求する勇気がなく、十分な収入にはなりませんでした。

そこで、嫁入り道具として作ったハイヒールを売ってもらおうと、なじみのモトヤ靴店を訪れます。

店主の元田は、惇子の子どもの写真を見た際に、綿スエードの布地に小花の刺繍がされた手製の写真入れに目を留め、「手仕事の品を、店内の陳列ケースに並べて売ってみては」と提案しました。

惇子は、早速夫や友人の田村江つ子（バンドー化学創業者の次女）に相談し、江つ子の義姉・田村光子（田村駒創業者の長女）、村井ミヨ子も加わりプランは動き始めました。いずれも手芸や洋裁の技術を身につけており、それぞれの夫も「これからは女性といえども家庭にじっとしている時代ではない」と賛成しました。

（2面につづく）

「べっぴんさん」や「ファミリア」の社史

惇子たちは、自らの子育てに外国の先進的な育児を取り入れていたことから、よりよいベビー衣料品を作ろうと、1948年12月4日、神戸三宮センター街のモトヤ靴店内に「ベビーショップ モトヤ」は誕生しました。

商品は、赤ちゃんの肌着やベビー服、アップリケや刺繍つきのよだれかけ、エプロン、子供服、また手編みのレギンス上下やサックコート、ソックス、手袋などでした。

刺繍糸や生地は、戦前から蓄えていた外国製の上質なものがほとんどで、当時粗悪な衣類が出回る中、異彩を放っていました。開店当初から、並べるより売れる方が早く、陳列ケースはつねに空きスペースが目立つ状態でした。

順調なスタートでしたが、商売のイロハを知らずに始めたため、開店から最初の1ヶ月は、糸二玉分の儲けだったそうです。

【阪急百貨店から声がかかる】

その後、モトヤ靴店近くに空き店舗が出て独立店舗となり、1950年4月12日、株式会社ファミリア（ファミリアの由来は、家庭的を意味する英語 Familiar から）を創立します。

創立から1年も経たない頃、阪急百貨店の社長・清水雅が夫人と神戸を散歩中、ファミリアの前を通りかかった際、美しい縫製と西洋のデザインに感動。取引の要請を受けます。商品のかわいらしさもさることながら、販売員の接客態度の良さも大きく評価され、次第に大阪の人に知られ始め、阪急の店内でも評判になりました。評判を聞きつけた高島屋や伊勢丹からも子供服展開催の誘いがありました。阪急百貨店への出店は、ファミリアが全国へ向けて発展していく礎となりました。

【伊勢丹担当者の驚き、皇室御用達へ】

1954年4月に、高島屋で開催された「ファミリア子供服展」では、初日の売上げ25万円を記録。当時のベビー・子供服の催物としては画期的なことでした。翌日

になると、噂を耳にした他の百貨店関係者や問屋筋、メーカーの人たちが会場に訪れ、ファミリアの商品のセンスと仕上りの良さに驚嘆しました。

『伊勢丹百年史』（1990年刊）には、1954年に伊勢丹で開催された「神戸ファミリア子供服展示即売」について、「同社スタッフは開始に先立ち、商品構成やその配置、有効な通路のとり方、使用するマネキン人形、照明の色や装飾に至るまで詳しく指示し、関係者を驚嘆させた。当社担当者は、この催しを通じて子供服専門店の展示レイアウトや販売手法の優れたノウハウを吸収するとともに、大人の服とは異なる子供服のオリジナル性を教えられた。」と記されています。

これは、惇子が開催にあたって、レポート用紙40枚ほどにビッシリ書き送った販売計画に基づくものでした。展示会は、予想をうわまわる売上げでしたが、閉店後に反省会を開き、夜中になってもケースの配置や商品を入れ替えるなど、惇子

たちの仕事のやり方や情熱、バイタリテイに、伊勢丹の担当者はただ圧倒されるばかりだったようです。

1959年の皇后陛下ご懐妊時には、高島屋から「ぜひ、ファミリアの商品をお目にかけて」と声がかかり、惇子が御所へご説明にありました。そして、ご出産準備品からベビー用品までファミリアがお仕度を仰せつかりました。

【商品づくりと惇子の先見性】

デパートの展示会で発揮されたバイタリテイは、商品づくりでも同様でした。商品は、我が子に着せるつもりで、最低3年は着られるように心がけ、子どもの運動のはげしさに耐える素材を選んで、糸が切れないように必要な箇所は2度縫いしました。また、生地が縮んだり、布目の曲がりや寸法違いが出ないように、布地にあつた下処理をしてから作るなどして、高い品質を維持しました。

惇子は、商品企画で先見性、独創性を発揮し、幼児向きの絵柄をプリントした服地やプリント物のタオルハンカチを開発し、それまで肌着としか見られていなか

ったTシャツに子熊のイラストをプリントしてアウトウェア化しました。

そして、外国のいいものを多くの人に見てもらおうと、育児用品の輸入にも注力しました。また、スヌーピーの版權の契約を結び、1970年には日本で最初にスヌーピーを商品化し販売しました。

商品を陳列ケースに並べるだけでなく、子どもの身長別サイズが一目でわかるように色分けタグを考案したり、コンサルタントによる育児相談や解説書である「ファミリア・ガイド」を1952年3月に発行し、日本の育児教育の啓蒙に先鞭をつけました。ほかに、お客さまに何らかの形でお礼がしたいと考え、当時、先例のなかった友の会を立ち上げるなどしました。

【ファミリアを発展させたもの】

ファミリアが大きくなるにつれて、創業者4人にも役割分担が生まれました。惇子は営業や商品企画、光子は商品の生産、江つ子は手芸部門、ミヨ子は毛編毛糸商品を担当し、それぞれ現在のファミリアの商品づくりの原型となりました。

中でも惇子と共に、特に中心的な役割を果たしたのが田村光子です。

『ファミリア三〇年のあゆみ』によると、二〇周年を祝う会の中で京阪神電鉄（現、阪急電鉄）の清水雅会長は、

「どうして、この二〇年間に、こう大きくなったのか。この理由を考えてみますと、まずその一つは、岡本の田村光子さんのお宅に伺ったことを考えます。田村さんは大きなお宅の焼けあとを、その当時、大半を工場に変えておられ、自分たちは裏の方に引っ込んで、良い場所を工場代わりに使っておられました。この熱意には、私はびっくりしました。なんとと言っても、商品の製造が中心で、それを販売するのではありませんが、自分たちの家庭よりも商品づくりを大切にされた田村さんのこの熱意が、今日非常に大きな力になったと私は思います。坂野さんの奥さんは、佐々木営業部（のちのレナウン）のお嬢さんで、田村光子さんは、ご承知の田村駒のお嬢さんであります。私は、なにかこの先代から流れておるひとつのあるものがずっとそのまま流れてきて、この流れが、今日、ファミリアを大きくしたひとつの大きな力になっておるような気がしてなりません。」と述べています。

○

(3面から続く)

惇子が『ファミリア25年のあゆみ』に寄せた寄稿の中に「はからずもファミリアと一緒に創設したわれわれ女性と主人たちが、お互いによく似た環境に育ち、小さい時から美しいものに接するチャンスに恵まれていたことが、良いものをつくろうとしたファミリア発足の根底に流れていたような気がする。」とあります。

ファミリアは4人の女性によって創立しましたが、それぞれの夫たちも理解を示し、主に経営面でファミリアを支えました。(後に、請われて惇子の夫である坂野通夫が社長に就任します)。ファミリアのモットーのひとつ「男女の和と努力」は、男女がうまく長所を生かして発展してきたファミリアの歴史を象徴するものなのかもしれません。

○

私事ですが、幼少の頃、神戸に居住しており、時々、母に連れられてファミリア創業の地である三宮センター街のお店を訪れました。子ども心にもファミリアのお店は印象に残っており、今年、久しぶりにセンター街を訪れた際にも思わず探してしまうほどでした(現在は移転)。今回、ファミリアのあゆみをたどり、その成り立ちや込められた思いを知ることができ、ファミリアが自分を含む多くの人に強い印象を与えた一端を垣間見ることができたように感じました。

(科学情報課・青山)

【特色ある装丁の社史】

新着社史の棚で『Akashi Hifuku Kogyo Co., Ltd.』(2012年刊)という社史が目にとまりました。明石被服興業株式会社(本社、岡山県倉敷市)が80周年を記念して刊行した社史です。同社は「富士ヨット学生服」などで知られる学生服のメーカーです。

さて、この社史、装丁がとにかく凝っています。文章では伝えにくいのですが、頑張って説明していきます。まず、本書を開くと、大きく社屋の写真が掲載され、折り込まれている部分が展開し、左側と右側の二つの部分に分かれます。

左側のパート「THE CHRONOLOGICAL TABLE」は、おもに年表です。薄い紙に印刷され、下地の模様や写真が薄く透けて見えるようになっています。

右側のパート「THE HISTORY」は会社の歴史を、いろいろな角度から取り上げています。会社の歴史をわかりやすく記しただけではなく、たとえば、「歴代社長の肖像画」「支店長が語る自社ビルまでの道のり」「OB放談会 この際なんでも話しましょう」「Q.この写真は何の光景でしょうか?」や、「会社のいろんなところ、ご案内いたします。」「伝統の別注学校制服、一例をご紹介します。」「制服が出来るまでの工程すべてお見せします。」「あかし流サラリーマン川柳」などのコーナーも。

写真も多く掲載され、学生服の歴史としても、地域の産業史としても、読んで楽しい社史だと思います。ぜひ、社史室でご覧ください。(科学情報課・高田)

●お問い合わせ先 神奈川県立川崎図書館 科学情報課

〒210-0011 川崎市川崎区富士見2-1-4 電話:044-233-4537

<http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>